

令和 5 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名： グループホームほほえみの家 B棟

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372100743		
法人名	社団医療法人池田記念会		
事業所名	グループホームほほえみの家 B棟		
所在地	〒020-0637 岩手県滝沢市高屋敷平11-1		
自己評価作成日	令和5年8月1日	評価結果市町村受理日	令和5年11月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は同一法人が経営する介護老人保健施設と神経科・内科クリニックの隣接地にあり、福祉と医療が連携を密に図りながら、利用者様が安心して穏やかな生活が送れるように支援している。現在も新型コロナウイルスの感染対策を継続している為、利用者様は外部との交流や外出が制限される状況が続いている。そのような中でも少しずつ以前の日常を取り戻すため、近隣の保育園と交流を再開、自治会とも草取りを通じて交流を図っており、今まで築いてきた関係が途切れないように取り組みを進めている。また、利用者様がホームに閉じこもることがないように、ホーム周辺や敷地外を散歩したり、花見などのドライブに出掛ける等可能な限り外出する機会を設けている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

敷地内に同一法人のクリニック、介護老人保健施設が隣接し常に連携が取りやすい体制が取られている。医療との連携が取りやすい体制にあることから家族・利用者から安心感をもって受け止められている。また、向かいには保育園もあり、感染予防に配慮しながらの園児との交流は利用者にとって癒しの場面となっている。さらに敷地内にはバラ園、畑等もあり、利用者は敷地内の散歩、畑仕事など自然に恵まれた環境の中でゆったりと過ごしている。事業所は開設から22年を経過し職員間で協議を重ね各種指針等を作成している。また、職員間で係制を設け役割分担を明確にし、情報共有しながら日頃の介護を行っている。2か月に1回開催している運営推進会議には利用者の状況、事業所の運営状況等きめ細かい資料を提出し、出席者からも多くの発言があり、意見交換の内容が事業所運営に生かされている。各種取り組みにあたっては、計画・実践・評価をきちんと行い質の高い介護に取り組んでいる。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年8月30日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	常に理念を意識して動けるようホーム内に掲示しているが、職員間で理解に差がみられる。勉強会を開催し、理念のキーワードをBS法を用いて理解が深められるように話し合いを続けている。	理念を共有し実践に繋げるために、玄関・談話コーナー・台所に掲示し、理念のキーワードを復唱する等の取り組みを行ってきた。しかし、職員間の理解度に差があるため、令和4年6月に理念のキーワードの見直しを行い、①利用者目線、②職員目線 について意見交換を行い、その結果を掲示し職員間の意識付けを図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの感染拡大に伴い日常的な外出や地域交流は制限されている。しかし、感染状況をみながら少しずつではあるが、距離を保ちながら保育園や地域の方々と交流を行っている。	自治会に加入し回覧板と一緒に事業所の広報誌を回覧してもらう等、事業所の状況を近隣住民に情報提供するようにしている。コロナ禍以降近隣保育園児との交流を控えていたが、今年度は保育園児が玄関先に訪問し外で踊りを披露したり、鯉のぼりや七夕飾りを作ってプレゼントしてくれる等、園児との交流は利用者から非常に喜ばれた。また家族や自治会の皆さんから草取りなどの協力を得ている。今後状況を見ながら秋の草取り、敬老会での保育園児との交流等を計画したいと考えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域で生活している方が認知症の症状で対応が難しいことがあれば、いつでも協力できることを運営推進会議内で伝えている。又、滝沢市からの委託を受け『認知症まちかど相談室』の窓口を設置し、いつでも相談に応じられる環境を整えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍により、市の施設を利用して開催していたが、今年度よりホーム開催としている。委員からの意見を運営に反映できるよう、取り組める内容から順次取り組んでいる。検討事項や2カ月間の取り組み状況を報告し、会議の中で出された意見を職員会議で検討し次回の会議で報告している。	「運営推進会議設置要綱」を定め、利用者、家族、自治会長や自治会福祉部長、保育園長、地域包括支援センター、系列老健事務長等の出席の基に活発な意見交換が行われている。地元自治会長には1回目と6回目に出席をお願いしている。令和4年度最後の会議では、令和4年度の会議の成果及び事業所運営の評価を行い、事業所全体の取り組み状況を報告した。議事録も詳細に作成され家族にも送付している。今年度は2カ月に1回対面開催とし、利用者の状況、ヒヤリハット報告等の資料をもとに活発な意見交換が行われている。会議で出された意見、要望は職員間で協議の上、次回の会議に報告するようにしている。	運営推進会議では、事業所の取り組み状況をわかりやすい資料に作成し報告している。出席者からは多くの意見要望が出され、活発な会議運営となり、結果的に利用者へのケアの質の向上に繋がっている。今後とも引き続き活発な会議運営ができるよう期待します。

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市からの要請で介護相談会への参加や相談窓口の設置を行っている他、日常生活自立支援事業の活用している方がいるので、日頃から社協に情報提供するなど連携を図っている。社協からの要請で銀行や郵便局の契約更新の立ち合いを職員が行った事例もある。運営に必要な情報は市からのメールで周知されている。求めに応じて報告は密に行っている。	運営推進会議には地域包括支援センター職員も出席しており、その都度相談できる体制である。市担当課とはメールで随時情報交換を行い、リアルタイムに助言を得ている。さらに2、3か月に1回市の介護相談員が2名来訪し、利用者との何気ない会話から思いなどを聞き取り、その内容を事業所にも情報提供していただいている。市の要請によりまちかど相談室を設置している。また、オレンジカフェにはコロナ禍以降、スタッフのみ参加しているが、状況をみて利用者の参加も検討していきたいと考えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	安全を確保するためにセンサーを使用しているが、日中は玄関の鍵をかけていない。利用者の表情や仕草から不安な気持ちを察知し、帰宅願望による行動が起きる前に本人の好む活動を提供している。3ヶ月に1回はスピーチロック月間として、スピーチロックの個人チェック表に取り組み、職員間で身体拘束をしないケアの実践に向けて取り組んでいる。	身体拘束をしないケアに関する係を設け、検討内容を毎月1回開催する職員会議で報告し全職員への周知を図っている。日中は玄関は施錠していないが利用者の状況に応じセンサーマットを利用し自由を束縛しないように配慮しつつ、安全確保に努めている。職員は常に利用者の動向に目配りをしている。スピーチロックに関しては、3か月に1回スピーチロック月間を設け、1か月間スピーチロックに関するチェック表で職員各自がチェックし、ケアの振り返りを行うようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者権利擁護養成研修に積極的に職員を派遣している。また、参加した職員だけでなく、他職員も自施設研修と一緒に取り組むことにより認識を深める良い機会になっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ホームに関わりある部分についてはある程度理解しているが、それぞれの制度の持つ役割については十分に理解しているとはいえない。そのため、勉強会や研修に参加する機会をつくり、理解を深めていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の申込をいただく時は、利用者やご家族が十分に理解し納得していただけるよう時間をかけて分かりやすい説明を心掛けている。また、生活の中で起こりうるリスク、重度化について細かく説明し確認書にサインを頂いている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からは介護相談員を通すなどして希望を聞き出す機会をもっている。職員も日常生活の中で出される希望や要望を大切に、会議などで話し合いの場を設けている。重要だと思われる事項については運営推進会議でも報告するようにしている。家族からは定期的に電話で状態報告をする時に要望や意見を聞くようにしている。	家族には定例的に電話連絡を行い、利用者の日頃の様子をお知らせしたり、家族からの意見要望をお聞きするようにしている。2か月に1回広報誌スマイルを送付し、利用者の日常の様子をお知らせしている。また、市から派遣される介護相談員との会話を基に、利用者の生の声を聴く機会としている。把握した意見・要望は運営推進会議で報告したり事業所運営に反映するようにしている。なお、以前に家族が参加し意見交換できる場があった方が良いとの意見が運営推進会議で出され家族会を開催したこともあり、今後再開するかどうか検討したいと考えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回職員会議を開催している他、必要に応じて会議を開催し職員の意見を聞く機会を設けている。会議で検討課題がある場合は、管理者が上司と相談しながら職員の要望、意見の実現に努めている。	毎月1回職員会議を開催し当日出席できない職員はリモートで参加することもある。職員から出された意見要望をもとに「仕事見直し係」が中心に業務改善に繋げたり、必要により法人の運営会議に報告する等、職員からの意見要望が日常業務に反映し具体化されるよう努めている。なお、職員全員の個別面談は実施していないが、業務上必要な案件が生じた場合には、随時面談を行っている。	管理者と職員との個別面談は一部の職員のみとなっており、全職員との個別面談は行っていない。職員個人個人の意見要望、業務上苦勞している点など具体的に管理者と一対一で話し合うことにより、職員の更なる業務への意欲向上に繋がると考えられることから、今後管理者と全職員との個別面談を計画的に実施することを期待します。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、管理者との協議の中で各職員の個々の努力や実績等を把握し、人事考課も加味し、向上心を持って働けるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在はオンライン研修が主だが、コロナ前は外部の研修に多くの職員が参加できるようにしていた。研修報告は職員会議内で行っている。また、職員の自己資質向上のため年4回の勉強会を開催し、働きながら学ぶことができる機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年度はコロナのため開催がなかったが、通常では1ヶ月に一回程度定例会があり、職員を交代で参加させている。定例会では他のホームと情報交換したり、事例検討や職員の交換研修などを行い質の向上に努めている。		

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前調査の中で生活状況を把握するよう努めている。利用希望者にはホームで過ごしてもらい雰囲気を見てもらっていたが、現在はホーム内の立ち入りを制限しているため行っていない。また入居時には家族に『私の基本情報シート』を記入してもらい、情報の把握に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居を希望するまでに至った経緯や今困っている事を聞き出し、在宅での生活継続も含めてホームの利用について説明している。また、現在は面会に制限があるため、定期的に電話報告することで、家族との信頼関係の構築に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ホーム利用に不安のある方は、入居するまでに短時間でもホームで過ごすように勧めていたが、コロナ禍でホーム内への立ち入りが制限されている為、ipadで撮影した動画を見てもらい、不安の軽減に努めている。相談時に緊急を要する場合、他のグループホームの空き状況を確認したり、他の施設を紹介するなどの対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自分が必要とされていると思って頂けるようにその方の能力に応じた役割をお願いしたり、活動に参加できるように配慮している。利用者は人生の先輩であることを職員間で共有しながら、尊敬と感謝の気持ちで接している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナのため面会制限中である。そのため2カ月に1回電話で近況報告し、利用者の健康状態や生活の様子を伝え、家族と情報共有するよう努めている。運営推進会議の委員となった家族がホームの事情を知ることで、環境整備などに積極的に参加してくれるようになるなど変化がみられている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所(昔住んでいた地域)や自宅に行ったり、訪ねてくる知人との面会、外出には柔軟に対応している。利用者の中には、年賀状や手紙のやり取りで知人との交流を深めている方や海外の家族とLINE電話で会話する方もいる。コロナ禍でも関係性が途切れないように支援している。	契約時に、利用者、家族からの聞き取りをもとに「私の支援マップシート」を作成し、これまでの関係者、馴染みの場所等の把握に努めている。コロナ禍以前は家族や知人等の面会があったが、コロナ禍以降は家族や知人等の面会がなくなった。しかしながら、理容師、看護師、歯科医師、薬剤師、バラ園の手入れに訪れてくれるシルバー人材センタースタッフとは馴染みの関係となっている。今後、コロナ禍以前に来訪し馴染みの関係になっていた傾聴ボランティアの来訪も、状況をみて再開したいと考えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が、自然と生活の中で助け合ったり支え合っているのを見守っている。何か困っているような時は職員が間に入り支援している。また、利用者が個々に他の方を気にかけて支え合っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	これまでの生活環境が損なわれないように、支援の内容、注意が必要な点について情報提供する体制を整えている。ホーム側から積極的に連絡をとることはないが、過去には家族から連絡があり相談を受けたこともある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりのなかで利用者の言葉や表情から意向の把握に努めている。家族から得た情報も記録に残してケアに活かしている。また、認知症状による行動や言動についても利用者の思いに寄り添うケアを実践している。	契約時に作成した「私の支援マップシート」をもとに、利用者の思いを職員全員が共有し対応している。居室担当制はとっていないが、全職員が利用者の何気ない一言、仕草から利用者の思いをくみ取り、記録に輸入し、全職員が随時その内容を把握した上で、利用者の思いに寄り添うケアを実践するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の生活歴や嗜好など把握するために専用のシートを用意しご家族に記入を依頼している。また、不足している部分があれば本人や家族から聞いたことを記録に残して、職員同士で把握できるようにしている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員が利用者対応で気付いた事を詳しく記録に残すようにしている。状態変化がある時は必ず申し送りで伝達し、どの職員でも対応できるように共有するよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当者が作成した計画を基に、カンファレンスで支援の方向性について検討している。内容に応じて法人の看護師や作業療法士に助言をもらい、家族にも意見を聞き要望がある時は計画に反映させている。症状の変化や状態に応じて見直しも行っている。	介護支援専門員有資格者が5名おり、分担して介護計画を作成している。計画作成に当たっては、これまでの暮らしの情報、利用者、家族の意向はもとより、主治医、看護師の意見も踏まえ作成している。計画内容は責任者が点検の上、利用者も参加してカンファレンスを行っている。作成した計画は利用者・家族に説明の上同意を得ている。介護計画に基づき全職員がケアプランを実践し、月1回のモニタリングを行い評価するとともに、6か月ごとの点検を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や気付いた事を詳しく記録に記入し、情報を共有するため申し送りで伝達している。介護計画はケアチェック表、記録を参考にしたり、職員から話しを聞きながら見直しをしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ感染対策ため外出には慎重になっているが、手芸店に買い物へ行ったり個人買い物の付き添いをしている。通院の付き添いなど家族と利用者のその時々要望に応じ柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議に自治会の代表や包括の職員に参加して頂き、周辺情報や支援に関する情報交換、協力関係を築いている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	隣接地にクリニックがあり受診の付き添いは職員が対応しているため、かかりつけ医に選んでいる家族が多い。専門科目以外の病気については家族の希望を踏まえ他科受診で対応している。他科受診は基本的に家族に受診対応をお願いしている。	基本的には、かかりつけ医の選択は自由であり、契約時、利用者、家族に意向を確認している。敷地内クリニックには事業所職員が受診同行できるが他医療機関の場合は家族の同行が必要である旨説明している。その結果ほとんどは同一法人クリニックをかかりつけ医にすることが多い。主治医の専門科以外の受診は、原則家族が同行している。毎週月曜日の看護師の訪問、2週間に1回の歯科医師の訪問、薬剤師の随時訪問、隣接施設リハビリ職員からの助言を得ることができる体制が構築されている。利用者の一般状態の確認、職員への助言などにより、より良い状態で生活できるよう支援しており、家族からも好評である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師に利用者の健康状態など気になることを報告し、対応方法など助言をもらっている。医師への報告が必要な場合は、看護師が伝達する役割を担うことで、正確な情報が伝わる仕組みになっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	利用者が入院した場合には情報提供書などを利用し、本人の情報を細かく伝えるようにしている。病状説明の際には家族だけでなくホーム職員も極力参加し、医療機関との連携をはかっている。また、早期退院が可能な場合は部屋を確保しておくなど、退院後スムーズにホームに戻ることができるよう対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化等の対応指針を定めており、契約時に説明し理解を得ているが、基本的には家族の意向を尊重しながら対応している。ホームでの看取りを希望する時は隣接する医療機関と連携して対応し、他の施設を望む場合は紹介することになっている。	「利用者の重度化及び看取り介護に関する指針」を定めており契約時にその指針に基づき説明している。なお、医療行為の必要な看取りは体制上不可能であるため、その場合には家族に説明の上他機関を紹介することとしている。利用者の一般状況に変化が生じた際には、家族にその都度連絡し意向確認しながら隣接する同一法人医療機関と連携を図りながら対応している。看取りに関して同一法人施設の看護師を講師に研修会の開催、必要な資料の提供を受ける等の取り組みを行っている。	

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急手当の勉強会を実施し習得するようにしている。様々な場面に対応できるようマニュアルを整備し周知徹底をはかると共に、実際の場面を想定しながら職員間で確認するようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回日中と夜間想定消防訓練を実施。台風などの災害を想定しマニュアルに沿って各職員に担当を決め、物資の購入や情報収集、設備の点検を行っている。非常食も備蓄した。職員間の連絡方法としてグループLINEを活用し、今年度は災害を想定した訓練も実施した。	年2回、日中と夜間想定消防訓練を実施している。災害時に備え、隣接する同一法人事業所及び近隣住民を災害協力員にお願いしている。今年度の消防訓練の際には、火災報知器が作動し、臨場感あふれる訓練にはなったが、火災報知器の音量が大きく職員同士の声が聞こえにくかったり、利用者がパニックになり部屋に閉じこもる等の課題が出された。課題については今後備え職員間で情報共有し検討していくこととしている。なお、過去の夜間想定訓練ではヘッドライトが必要との改善策も挙げられ実際購入するとともに、非常食も備蓄している。	

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は利用者の尊厳を傷つけないように心掛けてケアをしている。しかし、利用者が不穏になった時に適切な対応ができず、不適切な言葉遣いやケアがみられたため、職員会議で話し合いを行った。言葉選びの大切さや言葉の速さや口調の強さなどを再認識するとともに、当ホームのケアの考え方についても話し合い、配膳された食事をすぐに食べる利用者の対応について、ケアの統一を図った。	利用者の尊厳を傷つけないようにするために、理念のキーワードの具体化を職員間で話し合い、日頃のケアに生かせるようにしている。しかし声のトーン、強い口調、不適切な声かけ等、配慮に欠ける場面が見受けられる時もあり、その際には、職員間で話し合い、対応の仕方について再確認し、質の高いケアを目指すよう職員一丸となって取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	お好みメニューやおやつ選びを通じて利用者が生活の中で自己決定が出来るような仕組みを取り入れている。また、自己決定出来ない方は飲み物リストを活用し、選びやすいような働きかけを行っている。誕生日にはケーキなど希望の物を召し上がっていただいている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	散歩などその日の利用者一人ひとりの希望やペースに合わせて支援しているが、対応が難しい場合は本人に説明をし、待ってもらるか他の活動に気が向くよう誘っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時には爪切りや髭そりを行い身だしなみを整えている他、生活の中で衣服の汚れを見つけた時にはすぐに交換するようにしている。自力で下着交換をできる方には自室に洗濯かごを準備し対応している。散髪や毛染めの希望もあり、訪問理容を活用しニーズに答えている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	感染対策のため買い物は休止中だが、食事への関心や意欲を高めながら楽しめるように、週2回、利用者から好みのメニューを尋ねたり、献立と一緒に考え提供している。一緒に収穫した野菜等を使用し、季節を感じてもらえる機会を持っている。日常的には下ごしらえ、盛り付け、後片付けに参加してもらっている。	食事は3食手作りとしている。コロナ禍以前は利用者も一緒に職員と買い出しに出かけたが現在は職員だけで出かけている。利用者同士が話し合い食べたいものを考える「夕食献立会議」を週2回開き、チラシや料理番組等からヒントを得て決めることもある。栄養面については隣接施設栄養士から過去に得た助言を基本にしている。利用者は可能な限り調理、盛り付け、後かたづけ等を職員と一緒にやっている。誕生会を2カ月に1回開催し、その際には本人の好みを取り入れるようにしている。また、過去には行事食として敬老会の仕出し弁当を提供し利用者からも好評であった。今後状況を見ながら行事食の提供を検討していきたい。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分量は大まかに把握している。(10時、15時、入浴時、各食事)ホールにはポットを設置していつでも飲める環境を整えている。食事量もiPadに記入して把握している。食事についても個別に対応しており、食事形態も本人の能力に応じて変更している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアが出来る方は見守りや声掛けをし、上手く磨けない利用者は磨く能力にあわせて最後に仕上げ磨きをしている。自分で磨くことに出来ない方に関しては毎食後のケアを行い、嚥下障害による肺炎防止等に努めている。舌苔がある方は専用のブラシを使用している。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの状態、状況に合わせて誘導等の対応をし、トイレでの排泄ができるように支援している。トイレに座った時に水の音を聞いてもらったり、一人になる時間を作り排泄を促す環境作りをするなど工夫している。	約半数の利用者が排泄は自立している。個々の排泄チェック表をもとに、トイレ誘導を行っている。排泄しやすい姿勢についても、利用者一人一人に合わせ工夫している。排泄介助の際には、職員同士の声かけ、職員間のサイン等、利用者の羞恥心に配慮しながら介助を行っている。また、食事面では朝食の玄米ごはん、水分補給等、便秘予防に努めている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	玄米ご飯や雑穀ご飯を食事に取り入れている他、食物繊維の多い野菜の献立にする工夫も行っている。便秘気味の方は、看護師に相談し適切な下剤の量を調整するとともに、早い段階での下剤服用を心掛けている。また、体操や運動を取り入れ自然排便を促すように心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそうした支援をしている	自己決定できる方は入りたい時間や同性職員の介助で入ってもらっている。職員が一方向的に決めず利用者のその日の希望を確認したり、入浴を好まない利用者には声がけなどの工夫をして入浴していただいている。	午後に入浴できるよう準備し利用者の希望を聞きながら対応している。菖蒲湯、ゆず湯等で楽しんでもらえるようにしている。基本的には個浴であるが、時には気の合った利用者同士が二人一緒に入り会話に花を咲かせ入浴を楽しむこともある。入浴は全身観察の良い機会であることから、担当した職員は気づいた点は記録に入力するとともに、申し送りの際に必要な事項を口頭で伝えている。場合によっては、皮膚の状態で気になること等があれば、Ipadで写真を取り、受診時または看護師来訪時情報提供し助言を得ている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	家事への参加や敷地内の散歩が日常的にあることで、日中の活動量を増やし夜間の安眠につなげている。家事はその日の体調や利用者の希望に合わせて参加をお願いしている。また、できるだけ利用者の生活リズムに沿って休息がとれるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の作用など薬剤表をファイルし、すぐに確認できるようにしている。また、薬を利用者に出す際にも3重にチェックをし誤薬がないように注意している。薬の変更があった場合には、本人の状態を観察、記録し変化がみられた場合には医療機関や薬剤師と連携を図っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族から情報を得た生活史をもとに、好みに合わせた楽しみごとを取り入れている。家事など一人ひとり役割を持ってもらい、手伝ってもらった時には必ず感謝の言葉を伝えるようにしている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染対策のため買い物や個別対応などの外出支援は自粛中ではあるが、天気の良い日はホーム裏のバラ園を散策したり、畑で野菜を収穫するなど日常的に外に出る機会を設けている。 その他にも感染対策をした上でドライブに出掛けたり、戸外でできる芋煮会や夕涼み会を開催して楽しい時間を過ごしていただいた。	コロナ禍以前は職員と利用者一対一で外出していた時もあったが、現在は個々の外出支援は行っていない。感染予防に配慮しながら、花見等ミニドライブを兼ねて出かける機会を設けている。また天気の良い日は、敷地内を散歩したりバラ園を散策する等、機会あるごとに外に出るようにしている。これまでも芋煮会、夕涼み会等変化に富んだ生活になるよう工夫している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在は常時お金を所持している利用者はおらず、支払いをする機会も少ない。近くのスーパーが認知症にやさしい店づくりを進めており、今後個別ケアなどを利用して利用者本人がお金を所持、使用する機会を作っていきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	毎年、年賀状を出しており、できるだけ本人に書いて頂くようにしている。また、新型コロナで面会が限られているため家族へ定期的に電話をする取り組みを行っている。利用者の中には家族や親戚に手紙を書いて日常的にやり取りをしている方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者の状況に応じてソファやテーブルのレイアウトを変更することで心地よく過ごせるように配慮している。また、昼食後はテレビや電気を消して音楽をかけるなど生活に変化をつけたり、定期的に季節を感じられるような写真や飾りを掲示している。	季節に合わせた飾り物、イベントの時の写真等壁にさりげなく飾っている。ホールには、テーブル2台、一人掛けソファ等を設置しており、また畳3畳分のスペースもあり利用者はそれぞれ思い思いの場所で、ゆったりとした雰囲気の中で過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールに複数人が座れるソファ、玄関先にベンチを設置している。利用者が個人や数人でくつろげる空間になっており、玄関先のベンチや椅子を移動し利用者が日光浴をしながらおやつやお茶を楽しむ環境づくりをしている。気の合った利用者同士が気軽に部屋を訪問できるような雰囲気作りが出来ている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホームほほえみの家 B棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好み のものを活かして、本人が居心地よく過 せるような工夫をしている	入所時だけに限らず、思い出の物や使い慣れた 物を持参して頂くよう働きかけている。居室内は テレビや椅子などそれまで使用していた物が置 かれ、家族の写真や鉢や花が飾られている。 ホームで準備したコルクボードには、本人や家族 の写真、飾りなどが貼られている。	ベッド、クローゼット、筆筒、洗面台を備え付けて おり、エアコンで室温を調節している。利用者によ ってはミニテーブル、写真、贈り物等を飾って いる。若い頃からの趣味である刺繍をしながら過 ぎず利用者もいる。コロナ禍以前は季節ごとの衣 類の入れ替えを家族が来て利用者と一緒に 行うこともあったが、現在は職員が中心になっ て行っている。掃除は職員が中心になっ て行っているが、利用者もできる範囲で職員と 一緒に行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境つ くり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わ かること」を活かして、安全かつできるだけ 自立した生活が送れるように工夫している	福祉用具を活用し利用者の行動を抑制せず職 員の見守りに対応できるようにしている。歩行不 安定の方がいるので家具の配置など工夫してい る。状態が変わった場合、その都度職員で話し 合い、本人の不安など取り除き自立支援に取り 組んでいる。		